

ライフデザイン学研究第14巻の発刊を迎えて

健康スポーツ学科 神野宏司

ライフデザイン学研究、第14号を発行するに当たってご挨拶申し上げます。学部開設以来14年、本号が平成最後の発刊となりました。奇しくも私が大学院を修了したのが平成元年でした。昭和最後の日々は論文提出締め切りを前に何とか使いものになり始めたものの数行しか表示されないワープロに向かい、ひたすらキーボードをたたいていた頃でした。その後のコンピュータがいかに進化し社会を変えたかは誰も知るところでしょう。コンピュータは小型化して携帯可能な端末となりました。さらにアメリカから世界に対する最大の贈り物とも言われるインターネットの普及によって、新聞、雑誌からマンガ本に至るまで電車の中で広げる姿も今となっては珍しい光景といえるまでになっています。さらに、ここ数年AIと呼ばれる人工知能は、チェスから将棋のみならず医療への応用まで進歩を加速しています。ところで、その裏では何が起きているのでしょうか。コンピュータ、AIともに数値情報がなくては何もできません。つまり現代は日常のあらゆる事象が数値化されようとしている時代ともいえるでしょう。数値化は客観的であり、説得力のある媒体といえます。それだけに我々には目の前に示されている数値がどのような方法、手順で得られ、整理されて示されているのかをよく理解し、思いをはせる必要があると思います。それなくしては「数字に遊ばれてしまう時代」となっていると思うのです。AIが進化する時代において研究、ことに数値によって研究の価値を示す分野では、改めて数値を得るために適切な計画・方法の元で収集、整理されることの重要性を感じる次第です。また、このAI時代は逆に数値化が容易でない分野が注目される時代とも言えると思います。本誌、ライフデザイン学研究もこの数値化できない、しづらい分野での研究が多く報告されており、さらに注目される価値のある研究が掲載されているものと思う次第です。

稿を終えるに当たって、本年度から活字印刷媒体を作らず、完全に電子化されることとなりました。思えば学部創立一年目に本誌の編集を任せられ、子ども支援専攻のU先生と表紙デザインから原稿のスタイル等、沢山の作業を進めた日々が懐かしく思い出されます。今後は電子化されることにより表紙が見られる機会は減るのですが、掲載された研究が今まで以上に多くの方々に引用され、次の研究活動に貢献できることを期待しております。